



第42卷 第2号

史学・地理学・考古学

- アメリカ革命史の歴史……………今 津 晃 (1)
- 漢代明器泥象と生活様式……………岡 崎 敬 (39)
——長沙・広州・貴州の場合——
- 平安初期の国衙と富豪層……………戸 田 芳 実 (79)
——国衙領形成過程の一側面——
- 守護赤松氏の領国支配と嘉吉の変 ……………水 野 恭 一 郎 (102)

書 評

- J. ホイジンガ著 兼岩正夫・里見元一郎共訳：中世の秋……………会 田 雄 次 (130)
- 石井孝著：明治維新の国際的環境……………池 田 敬 正 (135)
- 日本史研究会史料研究部会編：中世社会の基本構造……………石 田 善 人 (139)

紹 介

紫田実編：泉佐野市史 臨時貝塚市史編集部編：貝塚市史
高田市史編集委員会編：高田市史 大和高田市史編集委員会編：高田市史

史 学 研 究 会

京都大学文学部内

史
学
研
究
会

監察院 (Council of censors) を設けたことを指摘して、多数派必ずしも民主的行動をとるとは限らず、とこころを。

Morris, "The Confederate Period," pp. 154~155.

②⑦ ティッキンソンの人間像については拙稿「ジョン・ティッキンソンのえらんだ道」(史林、卅三の六)参照。

②⑧ Crowl, *ibid.*, pp. 18~19. Douglass, *ibid.*, p. 46. メリーランド革命をフロンティアと一般大衆との抗争として捉えたジェンセンの見方は正しくなく(Jensen, *ibid.*, pp. 20~21)。

②⑨ Douglass, p. 72 note.

②⑩ 植民地時代・革命期のアメリカが圧倒的に農本的社会でありながら、フロンティアとならんで都市が想像以上に歴史の推進力として重要でもあったとするブライデンボーの問題意識、従って都市生活のなかに革命への条件がどのように育まれていったかという彼のアプローチ——都市の機能を従来のように商業都市としてだけでなく生産的基礎(職人層の役割)からも捉え、且つ海港都市だけでなく内陸都市の発展にも着眼したのは傾聴に値する——は、近時の植民地時代・革命史研究において画期的意義をもつものであらう。姉妹篇としての Cities in the Wilderness (1938) 及び Cities in Revolt (1955) のなかで両著作の間に介在する Rebels and Gentlemen; Philadelphia in the Age of Franklin (1942), The Colonial Craftsman (1950) など。

②⑪ メリーランドにおいて民衆騒擾の比較的顕著な事例は、一七八六年の「チャールズ郡裁判所一揆」にすぎない (Cf. Crowl,

ibid., p. 75)。モナムーンは J. A. Munroe, *Federalist Delaware, 1775~1815, 1954*, pp. 67~71. 参照。同様に他の植民地で紛争の原因となったインディアン・セインギマン土地問題、海岸地方とフロンティアとの地域的対立はなかった。だから革命の原因は内部的な問題から生じたのである。隣接植民地との関係から生じた。

②⑫ Douglass, *ibid.*, p. 211.

②⑬ Douglass, *ibid.*, pp. 141~142.

②⑭ Morgan, *ibid.*, p. 18. 同様の見解は同く Morgan, "The American Revolution" in *The William and Mary Quarterly*, XIV, Jan., 1957, p. 7. に見ゆ。

執筆者紹介

- | | |
|-------|-----------|
| 今津晃 | 大阪大学助教授 |
| 岡崎敬 | 名古屋大学助教授 |
| 戸田芳実 | 京都大学大学院学生 |
| 水野恭一郎 | 岡山大学助教授 |
| 会田雄次 | 京都大学助教授 |
| 池田敬正 | |
| 石田善人 | 京都大学助手 |

時代にあてうるものであり、長沙、広州、九龍、貴州のもの
と同一の内容をもっていることも偶然ではないのである。

ここでは長沙をはじめとする華南各地の漢墓の出土品を
紹介しその比較のスケルツオをのべたが、これらの地は、
漢代の文献では、まさに辺境をかたる断片の言葉でかた

れるにすぎない。しかしその自然に適應する新しい生活様
式を確立し、その中に漢民族のもつ鉄と農業の文化を浸透
させつつある姿は、断片の言葉に耳をかたむけながらも二
千年をへて、いま再び陽光をあげた明器の姿の中にもくみ
とれるとおもうのである。(一九五九年一月)

貴誌(三九卷)第六号の「万葉集に見
える夜の船出」(一六八頁の埋草)を大
変興味深く拝見いたしました。
夜の船出と瀬戸内海特有の陸風海風と
を関連させたのは達見だと思えます。
私も葵田津の歌には、かねてから関心
を持っていましたので、K・N氏の御説
の蛇足となりますが、卓見を述べさせて
いただきます。

一九五六・一〇・三〇

岡田芳朗

万葉集卷一の「額田王」の歌、

「葵田津爾船乗世武登月待者潮毛可奈

比沼今者許芸乞菜」

の註、

「右檢山上憶良大夫類聚歌林曰。飛鳥
岡本宮御宇天皇元年己丑九年丁酉十二

月己巳朔壬午天皇太后幸于伊豫湯宮。

後岡本宮敷宇天皇七年辛酉春正月丁酉

朔壬寅御船而征始就于海路。庚戌御船

泊于伊豫葵田津石湯行宮。天皇御覽昔

日猶存之物當時忽起感愛之情。所以因

製歌詠為之哀傷也。即此歌者天皇御製

焉。但額田王歌者別有四首。」

いま、右の註から干支をもととして、

日付をもとめると、

飛鳥岡本宮天皇すなわち舒明天皇の九

年十二月壬午は、十四日で、グレゴリー

暦日では六三八年一月八日となる。

また、後岡本宮天皇すなわち斉明(舒

明后、皇極)天皇七年春正月庚戌は、同

じく十四日となり、西暦六六一年二月二

日にあたる。

舒明天皇九年の行幸啓の際に、夜間に

出帆したか、いなかについて明記されて

いないが、註の文脈から、どうも夜間に
出帆したようにとれる。

もし右の推想がゆるされるならば、い
ずれも月の一四日の夜の出来事である。
月齢十三乃至十四頃の、この地方の汐の
情況を見るといわゆる中潮から大潮にな
る時期で、満潮は午前八時―九時、午後
七時―八時頃で、干潮は午前十一―二時、
午後一時前後となつてゐる。したがつて
十四日夜は、月が高くなるにつれて、潮
が満ちて来る。

この地方の日没は、一月八日では午後
五時十五分頃、二月二十一日では午後五
時五六分頃となる。したがつて日没後満
潮まで二時間乃至三時間、月が雨天に近
づくのを望みつつ潮を待つわけで、「船
乗世武登月待者潮毛可奈比沼」という言
葉に実感がともなつて来る。

き特権商人と一般商人という類型もその一つであろう——をとる方が良いのではないか。次に氏の言う封建都市とは一六・七世紀の都市を指すらしいが、主として取扱われたのが、古代的政治都市として出発した京都であるため、主題とされる封建都市の成立を考えるには不適當であつて、京都では寧ろ古代都市から封建都市への転成が見られるのである。従つて、史料的な制約はあるとしても、寧ろ堺とか山口または石山寺内町の如き純粹の封建都市を素材とした方が、方法的に正しかつたであらう。また大塚史学を批判するの餘りに、封建村落から独立した新儀、散在商人が、畿内では反封建的性格をもつとし、さらに彼等が都市に移住むことより都市そのものを反封建的であるとするのは、性急な議論である。都市が農村と異つた構造をもつてあらうという氏の疑問は正しいが、そのために却つて性急な議論に終つたことを遺憾に思う。

最後に林屋辰三郎氏の「中世における芸能座の形成」をとりあげ、氏は、芸能座を宮座と商工業者の座との中間において考えるべき性格をもつことを説き、最初は出身地の領主の鎮守のための芸能座として出発し、やがて上漬権及びそれに伴う収益増加が楽頭職を通じてなされてゆく事情を説明している。芸能座の問題は氏の最も得意とする研究領域であり、短篇ではあるが多年の蓄積が香氣高く感ぜられる。芸能座の確立の項があまりにも尻切れトンボに終つているのは、聞くところによれば、まだこのあと、群小楽頭職の吸収統一が説明され、大和四座殊に観世座による芸能座の統一の完成まで論及される予定であると言う。

以上書評としては多くの紙数を費したが、なお紹介も不充分であ

り、批判も亦簡略に過ぎた。私の不得要領にもよるが、また本書の内容が短い書評では語り切れない程、高く豊かであるためである。全篇を通じて、石母田・永原・安良城諸氏の見解に対する鋭い批判を通じて、新しい中世社会の基本構造を歴史発展の法則の上に位置づけようとする共通の問題意識があり、個々の論文には多少の欠陥や疑問点が残されないでもないが、これだけの充実した論文集を公刊出来たということは、日本の中世史学界にとつても実に大きな収穫と言えるであらう。最後に執筆者各位は、私の日頃学恩を受け、また共に机を並べている先輩同学であるが、筆者の真意を伝えたい紹介や的外れの批評をした点があれば御寛恕願いたい。執筆者各位の今後一層の精進を期待して擱筆する。(A5版四六一頁 昭和三年六月 御茶の水書房発行 定価七〇〇円)

四二卷一「長州藩における慶応軍政改革」正誤表	
頁	誤
一一上段一二	報國隊 <small>(長府藩)</small>
一一上段一三	武陽隊
一一下段一一	北門隊 <small>(岩国藩)</small>
一一下段五	ルッター的 <small>(農民)</small> 同盟
	北門隊 <small>(以上岩国藩農民)</small>
	ルッター的 <small>(騎士)</small> 同盟

本書を親しみ易いものとしている。内容は序説、歴史、人文地理、民俗、旧跡伝説、社寺古文化財、文芸、人物、現代、教育、金石文、地名の各篇よりなり、歴史的諸事象全般にわたつてむらなく記述を圖られている。

先史時代に始まる高田の歴史は、築山古墳群に大和豪族の勢威を偲び、万城氏・当麻氏に古代豪族の盛衰を語り、その下に哀歎の人生を送つた祖先を考えさせるが、やがて中世には高田・万歳の諸氏が、乱離の大和に興亡の夢を残していく。この動向をかなり克明に追求されると共に、この基盤たる荘園制について特に一章を設け、二千余町に上る特異な大荘園平田荘の解明を行われたのは、筆者の苦心の窺える所であり、興味深いものがあつた。土豪高田氏の滅亡に中世は終り、近世高田が新しく商工業都市として発展する。寺内町の存在、町場の発展の情況は、それなりに現在学界の問題点でもあり、注目しうるが、この繁栄を支え、近代高田を準備したものは、綿業であつた。それ故に棉作と綿の流通過程、紡績業について力を傾けておられるのも私などには有難いし、この産業の實力を背景に、梅田雲浜が長州交易を行い、薩藩園産

会所が設置された事実には、維新史の一断面をよみとりうるであろう。かくして現代の高田の姿が展開するが、諸団体から戦歿者名簿まで、かなり詳細な記述が付されていて地元の人々にとつて親しみ深い内容となつていゝる。かようにこの大冊はすぐれた内容をもつてゐるが、若干感想を付加すると、叙述に精粗があり、一つの時代としては有機的構成に難がある点も問々見うけるが、各篇の構成を史的流れの中で統一して頂いた方がよかつたのではないかと思ふ。なおこの書物に史料篇を欠いてゐるのは残念で、特に村島家文書などは、何らかの形で公表して頂けるならば学界の爲にも歓迎すべきことであらう。とはいへこの大冊を完成された関係者の方々の努力に深い敬意を表したい。(A5版七八四頁 昭和三年四月 大和高田市役所発行)

(脇田 修)

編集後記

一読、ごらんのごとく、力作大篇が顔をならべることとなりました。一号からの増頁が、執筆者の意を強くしたわけでもあるまいが、篇数では、これまでとかわらない結果になつたのは、すべてこれ長篇のせいでありませう。ついに収載しきれず、次号にみおくらねばならぬ珠篇をめぐつて、論議に思はず大寒の一日をすごしたことでした。

増頁は、あくまで収載篇数をふやす方針からふみきつたもので、今後は各号約六篇を目標にしてゆきたいと思つております。なるべく簡潔に、「一篇四〇〇字五〇枚ていど」の原則をまもつて下さるようお願いいたします。おわりに、未納の誌代をお忘れなく。(西谷真治)

一九五九年 二月二五日印刷
一九五九年 三月一日発行
定価 一八〇円
史 林 (第四二卷 第三号)

発行所 京都市东山区吉田本町
京都大学文学部内
振替京都五一五五番
理事 宮崎市定
編集主任 赤松俊秀
印刷所 京都市下京区西七条御所ノ内東町三九
中村印刷株式会社

THE SHIRIN

or the

JOURNAL OF HISTORY

Vol. XLII No. 2

Mar., 1959

CONTENTS

Articles :

- The Historiography of the American Revolution.....*A. Imazu* (1)
- Ming-ch'i* (明器) *Ni-hsiang* (泥象) in the
Han (漢) Dynasty and its Mode of Life..... *T. Okazaki* (39)
—Cases in *Ch'ang-sha*(長沙), *Kuang-chou*(廣州), and *Kuei-hsien*(貴縣)—
- The Local Government Office and the *Fugô* (富豪)
- Class in early *Heian* (平安) Period..... *Y. Toda* (79)
- Governing Territory by the *Akamatsu* (赤松)
- Clan and the Upheaval of *Kakitsu* (嘉吉)*K. Mizuno* (102)

Book Reviews

Published

by

THE SHIGAKU KENKYUKAI

(*The Society of Historical Research*)

Kyoto University, Kyoto, Japan